

地域の情報

視覚障害者の職業自立に身を捧げた人々 ～骨格標本となった先達の情熱～

小西 明

1 はじめに

「三療（あん摩マッサージ指圧、はり、きゅう）を主とし、それらに関連した手技療法や物理療法、運動療法などを含む非薬物療法の総称を理療という」と述べられている（矢野,2015）。

古代より視覚障害者の男性は、語り部として、あるいは宗教者、平家琵琶の弾奏者の担い手であったが、江戸時代に入り杉山和一の鍼術をはじめとする理療の知識や技術を獲得していった。これ以後、幾多の困難な時代はあったが、理療は伝統的に視覚障害者の主な職業として位置付けられ、現在も中心的な役割を果たしている。

ここでは、新潟盲啞学校（後の新潟盲学校）に生徒の教材として献体された方々の志に敬意を表するとともに、献体による骨格標本の活用により、生徒の学習や職業自立の向上に寄与した事例を紹介したい。

2 私立新潟盲啞学校の設立

明治期に入り当道座の解体、更には明治18（1885）年「鍼灸術営業差許方」の発令により、営業の可否審査が行われるようになった。更に明治44（1911）年「按摩術営業取締規則」、翌明治45年「鍼灸術営業取締規則」の発令により、三療の営業を行うには試験に合格するか、指定学校を卒業して地方長官（知事）の免許鑑札を受けることが義務づけられることになった、と記されている（関野,1972）。

こうした背景から、明治40（1907）年7月17日、視覚障害関係者の念願かない「私立新潟盲啞学校」が県知事より学校設置の認可がなされた。同年10月10日新潟盲啞学校は、新潟市医学町通1番町の眼科医・竹山屯所有の民家を借り、鍼灸治組合の努力と、多くの協力者を得て開校式・始業式が挙行された（新潟県立新潟盲学校,2007）。

3 解剖学教材に自らを捧げた方々

開校は果たしたものの、私立のため学校財政は困難を究め、医師長谷川一詮氏、同鏡淵九六郎氏をはじめ篤志家による寄付や市及び県からの補助金等により、ようやく存続していた。したがって、教材教具にいたっては乏しい予算により、ようやく揃えられている状況にあった。この窮状を見聞し、三療の学習に必要な解剖学教材として献体された方々がおられた。

故 肥田 五郎太 殿

肥田氏においては、没後百年以上経過している上、記録に乏しく、蒲原宏の随想が唯一残るのみである。蒲原（1986）によ

れば『・・・前文略・・・肥田五郎太は新潟の下町に住んでいた極貧の盲目の按摩であり一人者だったが、鏡淵九六郎先生はこの按摩をよく自宅に呼んで疲れた体を揉ませ何くれとなくこの盲人の面倒を見てあげておられた。九六郎先生が盲学校の運営に尽力されていることを、かねてから知っていた五郎太は、再起不能の病に倒れるや、病床を見舞った先生に、これまでの恩に報いるため死後献体し、自分の全身骨格を盲学校に標本として寄贈することを申し出たのである。まだ新潟市に新潟大学医学部の前身である官立新潟医学専門学校が設置される以前のことである。・・・中略・・・』

官立新潟医学専門学校設立後における献体第1号は明治43（1910）年の富沢圓栄という新潟市西堀通二番町超願寺の僧侶であるが、盲人按摩肥田五郎太の献体はそれより3年前のことで、当時としては異常の事であった。・・・略・・・』

蒲原氏は肥田氏の献体について、新潟盲啞学校創設者の一人で校長を務めた、医師鏡淵九六郎氏のご長男である医師鏡淵潜氏からお聞きしたとのことである。九六郎先生は、前例のない肥田氏の尊い行為を後世に伝え供養の気持ちを込め、日和山墓地に小さな碑を建てられた。

故 久保田 清蔵 殿

新潟市下旭町七二三番地在住であって、大正13（1924）年3月28日結核にて57歳をもって逝去される。同年10月14日新潟医科大学に依頼し、安置されていた久保田清蔵氏の遺骨が整骨され、新潟盲学校が拝受する。同年12月23日新潟盲学校講堂で、第1回弔骨祭が挙行され、毎年この日に慰霊弔骨祭が行われるようになる。

久保田氏は通信工であった。晩年に胸を病み、新潟大学病院で故人となられた。だが、どのような因縁で骨格標本となられたかは、確かな記録や言い伝えが無く憶測の域を出ない。おそらく、生前に妻の伯父である鏡淵九六郎氏から盲学校設立の経緯や困難な運営状況の話を聞くにつけ、次第に影響を受けたのではないだろうか。

また、九六郎先生の姪である宇佐美昭子氏よれば「伯父は弱視だったんです。」とのお話を筆者は直接お聞きした。久保田氏は、九六郎先生の状況を見聞きするとともに、前述の肥田氏の骨格標本となって盲学校教育に寄与したとする貴い話などに影響を受け、自らも役立ちたいと決心し、遺言されたものと思われる。

故 前田 恵隆 殿

嘉永元（1848）年2月29日南蒲原郡大崎村、了応寺長男として出生する。明治9（1876）年8月15日新潟師範講習所小学校教師

範科卒業。明治26（1893）年3月25日県内小学校本科正教員の免許を受け、普通教育に尽力する。小学校長を歴任後、明治39（1906）年新潟市長の要請により、新潟盲啞学校設立代表者の一人となる。荒川柳軒氏が他界された後、新潟盲学校長に就任し、学校経営に当たる。昭和3（1928）年4月29日、八十歳の高齢をもって逝去される。前田氏は死後も盲教育のために尽したいと熱望され「余の死後は医学校に送りて解剖せしむること。余の骨は盲学校に贈りて、鍼按科研究に充つこと。」を遺言されたことから、御遺体は新潟医科大学にて安置される。昭和4（1929）年9月1日新潟医科大学にて整骨され、遺族より寄贈を受ける。翌日、関屋金鉢山新潟盲学校講堂にて拝受式が開催された（新潟県立新潟盲学校,1977）。

4 鍼按術と骨格標本

明治三十年代に入ると全国に盲教育、聾教育を施す学校が増設され、明治38（1905）年には26校を数えるまでになった。更に明治末期になると、盲啞学校は全国に50校余りに増えていた。だが、当時の各校の教育内容は統一されておらず、バラつきは否めない。文部省で一応の標準化が図られるのは、取締規則施行後である。

標準化の一例として、明治40（1907）年に開校した私立新潟盲啞学校の学校規則がある。規則第二条には「本校に普通科、技芸科ノ二科ヲ置ク」とあり、盲生徒のための技芸科は4年間の課程であって、各学年は週23時間の授業が設定された。技芸科課程は、音楽と鍼按術で構成され、第1及び第2学年の鍼按術には「生理、解剖ノ大意」が週6時間配当されている。当時から解剖学は、三療の基礎として必須の修得内容であり、骨格標本は人体を学ぶ教材として使用されていた。

昭和2（1927）年度から昭和5（1930）年度にかけて中等部鍼按科に在籍し、解剖学を学習した捧梅次郎氏による回想文「故前田恵隆、久保田清蔵両氏を偲ぶ」（新潟県立新潟盲学校, 1977）によれば『・・・前文略・・・骨格収納庫は不安定で、戸の立てつけも悪く、観音開きを開くと骨がぶつかり合ってカサコソと音を立てる。逆し字型の太い鉄の支柱に骨格が下げてあり、三百六十度に回転する頭骨と脊柱が固定され、肩甲骨と骨盤骨が、各々の位置に固定されている。

上肢は肩甲関節と肘関節ではずされ、下肢は股関節と膝関節ではずされるようになっている。解剖学の授業に、見たりさわったりしたものである。本物の人骨なので、模型では見られない骨の粗密、陵線、空隙など鮮明に触知でき、大変に便宜を得たものである。・・・略・・・』

捧氏が新潟盲学校で学んだ昭和初期、解剖学や生理学を骨格標本によって学習していた様子が記されている。骨格標本によって習得した学習内容は、半世紀後においても詳細に記憶として残されていた。

大正期に撮影された授業の記録写真によれば、生徒に骨格標本を触らせながら指導する教師の姿が残されている。教師は骨

格標本触察による授業を通して、献体者並びにその御家族に敬意と感謝の意を生徒に伝え、生徒はその意を汲み取り学習に励んだと言えられている。

また、教師は献体された方々の尊い志や願いを後世に伝えるため、骨格標本の拝受式や学校行事として慰霊祭を毎年開催し、生徒とともに遺徳を偲んだ。

職業自立を目指す視覚障害者への支援「手に職をつけ自立してほしい」との先達の熱い思いが献体として結実した。こうした篤志家の支援が、後の百余年にわたる視覚障害者の職業自立に寄与したことは歴史をみれば明らかである。先達の先見性に感服するとともに、尊い志を忘れてはならない。

5 おわりに

近年、全国の盲学校（視覚特別支援学校）高等部普通科在籍者及び理療科中途視覚障害者入学希望者の減少、障害の重度化・多様化による理療以外の進路選択などにより、理療科課程在籍者の減少が続いている。社会福祉の充実、職域の広がりなど視覚障害者をめぐる社会環境が変わりつつあるものの、平成26（2014）年のあはき施術所調査（藤井・矢野・坂井・近藤,2015）によれば、重度視覚障害者の73.7%は理療に就労している実態がある。時々の先人の刻苦奮闘、我が身を捧げた尊い精神、その思いや願いに応えた生徒や教師らによって、現在の視覚障害者理療業が支えられていることを確認したい。

尊い骨格標本で学んだ盲学校生徒は、新潟盲啞学校の他にはないと思われる。謹んで御礼申し上げ、安らかな眠りにつかれまますよう祈りを捧げます。この重みを、視覚障害教育関係者は次代につなぐ役割を担っている。過去に思いをはせ、先達の偉業に学び、今後の視覚障害者の自立や社会参加の在り方を考える一助としたい。

最後に、この小文をまとめるに当たり、新潟盲学校理療科生徒のために四半世紀にわたり解剖学の御指導をいただいた、新潟大学医学部名誉教授、新潟白菊会会長、医師熊木克治先生より、懇切な御指導を頂戴しました。心より御礼申し上げます。

引用文献

- 蒲原宏（1986）盲人・肥田五郎太の献体とその墓碑。点字にいがた,103.
- 新潟県立新潟盲学校（1977）創立七十周年記念誌.
- 新潟県立新潟盲学校（2007）創立百周年記念誌.
- 関野光雄（1972）日本における盲人の職業.日本ライトハウス（編著）,世界盲人百科事典,日本ライトハウス刊.
- 藤井亮輔・矢野忠・酒井友実・近藤宏（2015）あはき施術所調査.あん摩マッサージ指圧・はり・きゅう全国施術所調査報告書.
- 矢野忠（2015）理療教育の構築に向けて.吉川恵士（監修）,理療教育学.ジアーズ教育新社.